

診療画像技術学

II a X線撮影技術学

森 浩一, 西尾 誠示, 五反田 留見 編著者



1895年にX線が発見されて以来多くの撮影法が考えられ、更にコンピュータ断層撮影等新しい技術も発見・発明され進歩してきた。その過程の中で現在の臨床現場では使われていない、若しくは使う頻度が極端に少なくなった検査も少なからず存在する。例えば関節腔造影や子宮卵管造影等はMRIの登場により減少した検査の1つといえる。

これらの検査は筆者が診療放射線技師として仕事を始めたころは日常的に行われており、新しい技術や検査法が登場するたびに覚えたり、理解したりを繰り返してきた経緯がある。まだ診療放射線技師として経験が浅い人にとっても、同じように新しいことを学んで覚えることの必要性に異論はないと思われる。筆者の経験をふまえて言わせてもらえれば、前述のようないわゆる「減った検査」も理解することが重要だと考える。例えば、断層撮影からコンピュータ断層撮影に発展したように「新しい検査」は「減った検査」が基盤になっていることが多く、時代に適合し進化を遂げてきた。つまり「新しい検査」をきちんと理解するためには、現在使われていなくても「減った検査」を一通り勉強することが必須なのである。更に国家試験においても年々変化はしているが、「新しい検査」のみで構成されるとも限らないため「減った検査」も含めて広範囲に及んで学ぶことが必要である。しかし、実際に見たことのない検査を勉強することは昭和から平成移行期に資格を得た筆者達以上に大変な作業が待っていると考えられ、頭の下がる思いである。

本書は「減った検査」から「新しい検査」まで1冊で広範囲を網羅しているといっても過言ではない。全11章で構成されており、第1章から第3章までは診療放射

線技師の役割として、医療倫理・安全管理・チーム医療・基礎的な救急救命措置や技術について記述されている。チーム医療における診療放射線技師の役割は増大傾向にあるものの何を行えばよいのか判断に難しいところがあった。また、緊急時の対応についても本書内でふれており、造影検査に携わることも多いため副作用やショックが生じる可能性を常に自覚し、対応できるように意識や訓練をすることは医療人として重要でもあり必須でもある。第4章から第6章までは画像形成論・撮影法の基礎・線量評価について記述されている。診療放射線技師にとって核心部分であると共に、筆者にとっては多々ある理解困難な放射線領域の1つでもある。また、撮影体位や方向・運動の方位・基準点等忘れてしまうことも多いが、本書では多くの図が採用されており視覚的にも理解・復習しやすい。第7章から第11章まではX線単純・造影検査技術・X線CT検査法が詳細に説明されており、250ページを超える。単純撮影も日進月歩で変化しており、以前の撮影法でそのまま何年も撮り続けるという訳にはいかない。その点に関してもきちんと考慮されており変更点も含めて、撮影体位の写真とシェーマを中心に構成してあるため、初心に戻り新鮮な気持ちで読むことができる。造影検査技術では撮影法のみでなく最新の治療法も記述されており、救急撮影に携わる多くの医療人の道しるべの役割を担える1冊になるであろう。X線CT検査法では画像特性から画像解析・注意点・部位別の撮影が実際の臨床に役立つように書かれており充実している。その他、骨塩定量検査法から検診に至るまで放射線治療・核医学検査・MRI検査を除く診療放射線技師が行う業務のほとんどを網羅しているといっても過言ではない。以上のように本書は広範囲な内容を診療放射線技師教育に携わってきた教育・臨床施設のスタッフを中心に、経験と事例をもとに、ポジショニングの修正・改良も考慮し、現在の検査に使用されている方法を中心に「減った検査」も含めて、分かりやすくまとめて執筆しており、診療放射線技師を志す学生の教科書はもとより、医科学生、医用放射線の現場に従事する医師、診療放射線技師及びその他多くの医療関係の方々にも教科書や参考書等として役立つと思われる。筆者にとっても日常の学習や仕事のお供として机の一角に置いてある1冊である。

最後に本書が多くの放射線に関わる方々に愛用され、この領域が更に発展することを願う。

(渡邊城大 埼玉県済生会栗橋病院)

(ISBN 978-4-86003-491-7, B5判, 356頁, 本体価格4,600円(税別), (株)医療科学社, ☎03-3818-9821, 2017年)